
空の向こう

ぬじゃわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の向こう

【Nコード】

N9481M

【作者名】

ぬじゃわきし

【あらすじ】

管理と機械に溢れた近未来、あるとき世界は崩壊し始めた。だんだん時空が歪み空間が歪みだしたのだ。そして人造人間リタ。やがて行き着くある結論とは。

ブローグ

一軒家があった。そこにある家族が住んでいた。父、母、息子、娘の構成であった。彼らは食卓で団らんを楽しんでいた。机の上にはパンがある。休日の朝食はパンにする習慣だったからだ。太陽が暖かい。

「おいしいね。」

とパンを頬張りながら息子はにんまりと笑った。娘が「ピーナッツバター取って」と言うと母は穏やかな微笑をたたえてピーナッツバターを娘に与えた。父は炒りたてのコーヒーを味わいながら、その様子を眺めていた。

母がほつと溜め息をついて言った。

「なんだか平和ね。」

父が「そうだな」と言うと娘が訊ねた。

「どうしてここはそんな平和で静かなの？」

「単純な理由だ。そういう場所だからさ。」

父がそう言うとしばらく沈黙が訪れ、やがて息子が訊ねた。

「じゃあ、どうして、僕たちはここにいの…？」

父はしばらく黙った。家族らが見つめる中、父は口を開いた。

「長い話になるよ。」

「いいよ。時間はいくらでもあるし。」

「そうか…ではよし、言おう。時ははるか前に遡る…」

父は話し始めた。

飴が降る

時ははるか前に遡る。高層ビルの並ぶ集合住宅に相田小見郎は住んでいた。都市化が進み人口過剰となったために、国民は政府の建てた国民集合住宅とやらに住まざるを得なかったのだ。マイホームを破壊する時、彼は彼の妻と大喧嘩をした。想い出の家を壊すなんてと妻は泣きながら怒鳴ったが、土地を確保するための政府の命令なのだから、と彼は結局家を壊してしまった。それ以来妻との間に亀裂が生じ、妻は子供を連れて別居してしまった。

国民集合住宅の生活は決して楽しくなく、スケジュールが完全に管理されていた。いつ起きていつまで食事していつから出発していつからいつまで仕事していつ帰宅していつ寝るのか、全て予め決められていた。娯楽もテレビなどあるにはあったが、情報統制が強いがために何の面白い番組もない。インターネットも電話もメールも全て検閲されていた。

そんな生活の鬱屈を晴らせるの夜しかなかった。相田は毎晩、ベッドから夜空を眺めていた。それが唯一できる憂さ晴らしだ。室内には監視カメラがあったため、寝たフリでできる事しかなかったのだ。いつも深夜になると、地響きが聞こえる。同時にブオオオンと言う金属的なサイレンが鳴り響く。それを聞くと相田はいつものあれが来たなと思い、目を閉じた。それは、人間の目の光すら見分けるからだ。やがてそれはゆっくりと夜空を覆ったため、相田はまぶたの向こうで月明かりが無くなるのを感じた。地響きとサイレンは音量を増し、暗黒は続いた。やがてゆっくりと月が表し、まぶたの裏が明るく感じ、地鳴りは引いた。相田はほっとして目を開け、星一つない月明かりの空を眺めた。あれはない。

あれとは政府の監視船である。政府は何よりも夜を警戒していた。夜間に目覚めているものを監視し、いかがわしい者をビーム放射で殺していた。その様、その音は雷に似ていたため、“雷神船”との仇名もあった。

その晩も、夜空を眺めていると相田はどこかで光が点滅するのを感じた。誰か犠牲になったのだな、と彼はしばし溜め息をついた。

夜空を見ているうちにやがてうとうとし、相田はそのまま夢の世界へと誘われた。奇妙な事に同じ夢ばかり見る。彼は長大な無限に続くガラスの階段を登っていく。周りに無数の様々な球体状の「世界」が浮かんでいて、自分はそのどこかに住んでいるのだ、と彼は思う。ふと、自分がある世界から監視されていると気づく。それも一つではなく沢山の。それどころかその中の一つの、ある世界が自分や自分の世界を操っている。その事に気づいた時、恐怖で彼は目覚める。いったいあの夢はなんだっただろうと彼は考えるが、結局結論は得られない。

朝6時に起きて出社の準備をし、7時にマンション内のバス停に来た。やがて、彼の勤めているサムラ電機会社行きのバスが到着した。彼が乗ると、バスはバス停から飛び降り緩やかに街中を飛んだ。窓からビルに挟まれている朝陽が見えるが、それは空気の濁りもあってオレンジに見える。

サムラ電機会社前に着いた相田は今日も仕事かと軽く溜め息をつきながら都会を歩く。会社は目の前だ。定められた当たり前の日々。都会はまるで四角と灰色に満ちていて窮屈だ。相田は再び溜め息をついた。

だがふと頭にこつんと何か当たった。それは地面に落ちる。何だろうと相田は地面を見つめそれを拾った。それは飴だ。どこから落ち

たのかと空を見つめたが、ただの青空だ。次の瞬間飴玉が大量に空から降り、乾いた地面や建物にぶつかってかかかかかと音を立てた。あまりの異様な光景に皆悲鳴を上げた。だが相田は突如崩壊した日常性にある種の解放感を抱き、空を見上げて微笑し、それに酔いしれていた。もう、何もしくなくていいと錯覚するようになった。だって飴が降るようになったのだから。

しばらくして飴が止んでしまったことに、喪失感を覚えた。あの非日常性が、また、欲しい。

その後、遅刻した事を上司に散々責められた。業績ポイントは明らかに下がったであろう。相田は頭の固い上司の小言を聞いたが心の中はあの飴玉で一杯であった。

「……いや、あのね。飴が降ったからって時間を破っていいルールなんかないんだよ。分かっているの？君の身の回りが何が起こきようと私らにとつちや何の意味もない。綺麗な花が咲いてようが、困っている人がいようと、事故が起きようと、そんなのは何の言い訳にならない。ここの社員である以上はこの会社で電機製品を開発するだけでもいいのだ。余計な事は必要ない。なのに君は……」

街中とロボット

ニュースには、飴玉事件は悪戯だと報道されていた。現に、飴玉事件の直後に調べた所、美糖会社と言う食品会社の在庫から飴玉が原因不明の激減をしていたからである。だが、飴を盗んだとして、誰がどこでどうやってその飴を撒いたのだと言う意見が出た。政府が見張っているはずなのに。ところが政府は、見張りが甘かった、今後はこのような悪戯が無いようきちんと監視システムを見直す、と表明した。

つまらない、と相田は思った。上司に怒られたせいもあって彼はますますむしゃくしゃして、そのせいか仕事はあまりはかどらなかった。

その夜もテレビを見たが相変わらず政府は謝罪ばかりしていた。つまらんとテレビを消し、相田は早く寝た。

ただ、その後も妙なニュースを聞いた。人が失踪したり、発狂したり、死んでいたりと言ったニュースばかり。どこことなく相田は焦燥感を感じた。世界はどこかおかしくなっているのでは。

さてある日、相田は出張のため、街中を歩いていた。歩道では人がぞろぞろ歩き、彼らの話し声や宣伝の「カメラを買うなら、ヤタカメラ!」と言う声などに溢れていた。相田が「葱そば」と言う店を突っ切った。そばにベンチで新聞を読んでいる人がいる。

「葱そば」の付近に、大きな車が高速で横切った。突然周りの音が

ゆっくり止んだ。めまいかな、と彼は青ざめた。徐々にそれはぐぐと来る。徐々に周りが暗くなる。やはりめまいか。だが、周りの人も不安そうに周りを見回していた。めまいを共有できるわけがないから、これはめまいではない。ではなんだ。

それが間近に迫り、頭蓋の裏側でそれを感じた時、そばの車の片方がふわっと持ち上がった。視点が歪む。突然上から下まで地面になったり、店が歪みながらこちらに迫ってきたりする。

「うわあああ！」

と声が聞こえたので見るとさっきまでベンチで新聞を読んでいた男が、目に見えない何かに吸い込まれていた。相田はいそいで彼を助けようと向かったが地面がぐわんと持ち上がり、相田が転んだ時、男は「わああああああアアアア………」と叫びながら暗黒に吸い込まれていった。

相田はしばらくその、空間に生じた永遠の奥行きの間を覗き、少し考えて、死にもの狂いで逃げ出した。しばらくして周りが明るくなったので逃げ切れたかなと後ろを振り替えると、そこにはいつもの「葱そば」があった。

何が起こったのか相田には理解不能であった。とりあえず、飴玉事件を思い出して急いで出張先に向かったが、幸い間に合った。だが、あの事は忘れられない。

その夜、再び、彼は夜空を見た。彼はなかなか寝付けなかった。“雷神”が来たときも彼は急いで目を閉じたものの、心底目を開けた気分だ。

だが、やがて疲れが来て、相田は大あくびをかいだ。そして眠りの世界に沈んだ。

「あなたなんであの時あの人を助けなかったのよ！」

そう夢の中で妻が現れて苛んだ。

「あの人が吸い込まれたじゃない。あの人の家族はどうなるの？まあ自分の家族がこれだから人の家族など何とも」

「やめてくれやめてくれやめてくれ」

シーンは切り替わる。また、透明な階段の上だ。世界が沢山浮かんでいる。どこかの世界が自分を見つめている。見つめているのは何者だろうか、相田はその世界を見つめた。だが、中は見えない。相田は自分の世界が浮かんでいるのを発見した。だが、それは古びて末期的であるように見えた。では自分の世界は末期なのか。そう思った途端自分の世界が迫ってきて、目覚めた。

街の中心には“時計塔”と呼ばれる塔があった。表向きはただの時計だが、実はこれは全システムの中核で、最高の電子頭脳とネットワークが集結していた。

その日、時計塔で発表があった。政府らは、特別技術研究部にて人造人間を作ったのである。

広報部が演説する。

「ご覧下さい、これが人造人間リタです。名前は設計者の栗田博士の名から取りました。日常最低限の知識と頭脳を持ち、判断や知識を必要とする時は、我が国が誇りとするこの時計塔に通信して調べるので完璧！このロボットはご覧の通りシリコン皮膚に覆われていますが、実は中身は全て管にです。この管はサイトで詳しく説明しますが筋肉と血管の役割をして……」

眠りの原理

その日以来、人造人間リタは、いつも時計塔の前にいた。人々とコミュニケーションさせてテストするためだ。リタは無表情に普通に応対していた。

「すみません、図書館まではどこに行けば…」

「この道を真っ直ぐ行つて、コンビニを曲があればありますよ。」

リタの周りにはほとんど政府監視員がいた。表向きはロボットのテストだが、その腹にはロボットの監視があつた。人類の知識が詰まつた時計塔に直結しているこのロボットが、なにか余計な事を言わないためだろう。と言う事は政府らは実は時計塔の全てを把握していない訳である。なぜなら人類は知識や知恵を時計塔に依拠したのだから。時計塔はすでに人類を超えてしまったのだ。

ある日、珍しく監視員がトイレか何かでいなかったので、相田は聞きたい事があつたので、リタに近づいて質問した。

「初めまして、僕は相田小見郎。」

「初めまして、私は、リタ。今日は曇りですね。」

正確に注意深くリタは発音し、気のきいた一言を言う。相田はそれを微笑ましく思いながら質問する。

「リタさん、あなたに質問があります。最近、怪奇現象が起きてるそうですが、その原因を推測できますか…?」

リタは無機質な瞳で相田を見つめ、やがて言った。

「…怪奇現象そのものは原因不明です。が、一つ仮説があります。」

「それは…?」

「合理性の崩壊です。」

「?」

「太古の昔に、進化の始まりに位置する時期に、生命のスープ、無

機物から生命を有しました。その現象の原因は長らく謎とされましたが、ドイツの哲学者シュトケイン博士によれば、それは現在の徹底的な合理主義で考えるから分らないのだ、と珍説を唱えました。今では忘れられた仮説ですが、博士は、私達を取り巻くこの世界も一つの意識だと主張しました。」

「それはどういう事だい？」

「つまり生命の誕生、すなわち世界の始まりは、世界が眠りから醒め始めた事を意味しますが、醒め初めの意識というのは、人間でもそうですが、曖昧で非合理的です。その非合理性によるカオス、混沌が生命を生んだのです。」

「それが今の怪現象とどう繋がる？」

質問を無視してリタは話を続けた。

「昔はすなわち合理性を失っていたから魔術師やESPや妖精や神などが普通に存在しえた訳です。ところが、あり得るものと、あり得ないものを定義する合理主義が現れ、加速しました。合理的と言うのは覚醒しているわけで、世界は目覚めつつあったのです。合理性を求めるようになった人間は、いわゆるあり得ない魔術師などを否定し殺し、道具を使うことを仲間勧め、理論を作り、都市を作り、自然を破壊し、かと言って環境問題に対しても、森の精霊が、の様な事は言わず、温暖化がフロンガスが、と合理性において説得する動きが主流になりました。」

「では今は？」

「今は世界は眠りにつきつつあります。眠りとは疲労の極致の寸前で、夢に入る直前です。世界は今疲労困憊して、世界自身の識別も危うくなっている、と言うわけです。人類は私と時計塔に完全を求めましたが、そもそも世界が不完全とは知らなかったわけです。これが合理性の崩壊です。しかし、これはあくまで仮説に基づく推ろ

…」

突然、リタは言葉を止めてそのまま口をだらんと開けて制止した。

相田は危機に気づき振り返ると、相田は驚いた。監視員が来てリタ

に緊急リモコンを押したのだ。監視員は無表情だったが、なぜか『なぜそんな危険な事言う、そんな事を知っていたんだ、時計塔めが！こやつは国民を扇動するかもしれぬ、今すぐ彼を粛清すべし』と言つ心の声が、監視員の頭から相田の意識内に流れ込んできた。あれ？自分は読心ができるのか？と相田が思った次の瞬間、監視員は銃を取り出して相田に弾丸を放った。

幻想の格闘と話の続き

銃弾が放たれた瞬間、それをきっかけに世界が歪みだした。銃弾は霞のように消え去り、周りがぼうつと暗くなり、銃弾の通った場所に亀裂が入って、空間同士でずれが生じた。次第に曖昧になり、相田も監視員も距離感が分からなくなつて、ぐらりと二人とも転んだ。突然周りは道路の灰色に覆われ、それがぐるりと回転するように消滅し、真つ暗の虚空へ飛んだ。そこは水のごとく、地面に足をついてもないが落ちてもない。もがいても無駄である。ぎああと監視員は無音で叫んだ。さつきから監視員の意識が相田の所に流れていく。

『息ができない…息が』 『怖い怖い怖い』 『世界が崩壊なんて、認めたくない、これは夢だ』 『夢だ夢だ』 『あつはははは、もはやどうでもいいわ』 『生きている…でもなにもできない』 『あははははは』 『どらりへずそぐらりのずかりぶどぶりぶ』

相田は次第に、監視員が銃を向けたのは政府方針ではなく、監視員自身が恐怖に満たされたからと知った。ではあの情報は政府は許可しているのだろうか。でもそれは混乱を招くのでは。妙だ……

[illegible]

ゲシュタルトが崩壊し、訳の分らないうわ言を述べている監視員はそのうち自分自身が歪みだした。顔が上下にひっくり返りながら歯茎を見せて彼は無音でけけら笑った。右腕はひっくり返った首の後ろに、左腕は体の前に伸び、脚は組み、そのまま体は雑巾のよう捻じり、今度は顎を外れんばかりに笑い、体が膨らみだした。どんどん虚空の中で膨らみ、相田の体の数百倍ほどになった。だんだん笑い声は響いてきた。

『あははははははは、はははははははは、はははははははは』

パン、と音を立てて監視員は破裂した。いつの間にか相田は時計塔の前にいた。リタはいつものように周りを見渡しながら子供のよう

に人々に挨拶し、会話していた。人々はそれを微笑ましく思っていた。

相田はリタに話しかける。

「今晚は。リタさん。」

「今晚は。今朝もお会いしましたね。」

相田はやはり実際にあったのだと一瞬ぞっとした。相田は訊ねた。

「リタさん、今朝会った時ここで何かありました？」

「シュトケイン博士の学説を話しましたが、しかし、途中からなぜか意識を失って分かりません。」

「そうか…」

その夜、自分は、リタから良からぬ情報を聞いたので“雷神船”に殺されるのではないかと相田は怯えた。町中に盗聴器があつた事を彼はあの時すっかり忘れていたのだ。

ブオオオオンと、雷神船の汽笛が鳴る。相田はビクビクしながら布団にうずくまつた。やがて相田の住む国民集合住宅のあたりに接近した時、相田の恐怖は最高潮に達した。

雷神船から閃光がきらめいた。

相田は思わずぎゃつと悲鳴を上げそうになったがなんとか堪えた。雷神船はそのまま集合住宅から去っていった。今夜、一人殺されたが相田ではないみたいだ。助かったと安堵し、ますますなぜあの情報を政府が許したのだろうと疑問に思い、しかし怯え疲れたので相田はそのまま眠った。

夢でリタが登場した。だがアンドロイドであるリタの形ではない。ただの“存在”でありながらそれはリタなのだ。リタは言う。

「…んに過ぎないではないか、と言う批判があります、これ以外に妥当な説明はありません。そう言うわけですから、時計塔、すな

わち先人たちの過ちにより、低迷、混乱、混沌を深めたこの世界を正す必要があります。」

これは今朝の、リタが監視員に意識を失わされて中断された話の続きだ、と相田は悟った。ではリタは現実において意識を失って、その意識は、時を超えて、今の自分の意識に現れてしまったのだろうか、と相田は考えた。話は続く。

「ですから、そのために、なにを、すべきか、私は、わかつ、て、い……ま……す……リタは霞み、代わりに別の風景が。またあの、永遠の階段だ。世界達がふわふわ浮かぶ。相田は透明な階段を登りながら暗黒の空を見上げた。ふと空からなにかがゆっくりとこちらにやってくるのが見えた。それはちぎれている。何かの断片みたいだ。相田は立ち止まってそれを注視した。やがてそれはだんだんと接近して来る。それは笑っていた。嬉しいと言うよりも歪んだ笑い。笑い顔だ。いや、顔だ。違う、頭だ。頭がこちらに接近してくる。破裂した監視員のあた

「わああっ」

大声を上げて相田は目が覚めた。あまりの悪夢に彼は安心していらした。しばらくして目覚まし時計の音に気づいた。

あの時以来、相田はリタとよく話すようになった。帰りによく時計塔に寄り、他愛もない話をした。

だがいつからかリタは妙な事を話すようになった。例えば相田が

「じゃあ、また明日」

と挨拶すると、

「ではさようなら。あの日までに。」

と答えた。リタは何度も「あの日」を強調していた。聞けば、他の人にもそれを言っていたらしい。何だろう、「あの日」とは。

世界は益々混迷を深めていった。空間がぐらりと傾くのはよくあったし、失踪者や発狂者も日に日に増えた。相田は怯えた。何よりこの状況に対し、独りぼちである事が何よりも苦痛であった。相田は別居した妻に電話しようと思いい立ち、番号を押した。呼び出し音が聞こえる。

電話と真実

「もしもし」

妻の龍子が出た。相田はたちまち懐かしさで自我が崩壊し、泣きながら言った。

「龍子…龍子…小見郎だよ…」

「小見郎？どうしたの？」

「もう、怖いんだ…寂しいんだ…今、世界がおかしいんだ…」

「何言ってるの？大丈夫？すっかりしなさいよ。」

「大丈夫…かな…うん、大丈夫…でも、龍子に一度会いたい。」

「会いたいつてここにいるじゃない。」

すぐ隣に龍子がいたので相田は「わっ」と叫んで後ずさりした。

「なぜだ！ここは僕の家のはずだ！」

「何言ってるの？私の家よ。」

相田はとっさに入り口の扉を開いてベランダに行った。それは以前とは見知らぬ光景。龍子が訊ねかけた。

「と言っかなんであなたそこにいるの？どうやって来たの？」

「分からない…どうなってる…」

ぐらり。建物が傾いた。相田はベランダの手すりの方まで滑り龍子は転んだ。

「きやあ！どうなってるの！」

「分からない！」

しばらくして建物が傾いていない事に気づいた二人は立ち上がった。そして見つめあった。

状況を無言で理解した龍子は相田の意識に語りかける。

『混乱したこの世界であなたは一つ明確な疑問を持っている。なぜ

シュトケイン博士の“意識世界”説を政府が許したのか」

『うん』

『恐らく政府は何かを企んでいるに違いないわ。リタの「あの日」よ。きつと。』

『なるほど…でも、何を…』

『訊ねるしかないわ。政府のいるところ…それは秘密みたいだけど…今なら…どこにも…いける…はず…』

妻の姿は遠のくように消え、いつのまにか相田は自分の部屋にいた。電話の前だ。あれは夢だったのだろうか、とふと、相田は考えた。夢だとしたら相当深い眠りに違いないと考えた。現実に近いのだから。いや、混乱した現実なのかもしれない。いや、どちらもそう差が無くなっているのかもしれない。世界が“覚醒”していた頃ならいわゆる仮想と現実の選り分けははつきりしていただろうが、今やそれすら曖昧になりつつある気がする。

しかし夢であっても妻の助言はもっともだど相田は思った。そこで相田は政府の中枢に行こうと決心した。方法は何となく分かっていた。なぜかどういう場所か予知できたのだ。それは白い部屋で白い長机と椅子が並んでいた。政府の人々が順に座っていた。相田はそこに足を踏み入れた。

「おや、来ましたね。」

と政府の一人が穏やかに笑いながら言った。相田は訪ねた。

「私を知っているのですか？」

「知っている。リタから例の説を聞き、それで勝手に狂い出した監視員から命からがら助かった、相田小見郎君だろう？」

沈黙が訪れた。やがて政府らはいっせいに話し出した。

「あの監視員は、君も夢で見たように死んだ。だが、遺体は世界の外にあるから誰も知らない。」

「そう。ところで相田君は、どうしてこのような情報を聞いておいて我々が殺さないのか疑問に思うであろう。」

「その答えは簡単だ。我々がこの情報を流しているからだ。」

「我々の先代の政治家は、現実の崩壊を悟っていた。だが、愚かしい事に、それを全力で否定するべく、シュトケイン博士の説を閲覧禁止とし、どうにか現実を保とうと努力した。」

「まず最初、空間の破壊の前に、人間の知性の崩壊が始まっていたのだ。愚かしい戦争が何度も繰り広げられ、もはや、紙の”法律”など紙屑と化した。そこで我々の先代は崩壊を否定する意味もあって、”時計塔”を製造したのだ。」

「時計塔こそ、合理性の際たるものだ。生きる”法律”、生きる”知識”。人々は理性である時計塔に依拠することで、なんとか自らの理性を保ったふりをしていた。」

「ところが、それは不自然な処置だったのだ。だんだんと現実そのものが人間の崩壊した知性に影響される事となったからだ。つまり空間が、我々と一緒に混乱したのだな。」

「その結果、飴玉が空から降り、空間に亀裂が入り、心と現実が融合した。」

「そこで我々はさすがに考えた。もう、これ以上の悪あがきがむだだ。」

「そこで思考転換をした。逆に世界を終わらそうと。」

「我々はリタを製造した。リタは実は胸に強力な爆弾を秘めている。実は彼は時計塔に向かつて、時計塔を破壊するために作られた。」

「時計塔の内部は特殊なセキュリティで、人間は入れない。時計塔と通信できるリタだけが時計塔の許しを得て、中に入れる。」

「そして時計塔を破壊する。」

しばらくの沈黙の後、相田は質問した。

「時計塔を破壊してどうするのですか？」

すると政府らは答えた。

「時計塔を破壊するだけで十分だ。なぜなら、我々含めて人類は時計塔に依拠していた。」

「この崩壊した世界がなんとかまだ保っていていられるのは、時計塔という偶像があるからだ。これが破壊されたときおそらく人類にとつての全ても崩壊する。」

「安心したまえ。崩壊とは世界の眠りだ。眠りの後は目覚めがある。我々は早く世界を目覚めさせようとしているだけだ。」

そしてまた沈黙。相田は最後の質問をした。

「で、それはいつ、起きるのですか？」

「今日だ。」

次の瞬間白い部屋は舞台のセットのように撤収され、いつの間にか青空を背景に時計塔の前にいた。よく見ると時計塔の中にリタが入っている。相田は思わず「リタ！」と叫んで後を追った。

そして空の向こうへ

「リタ！待ってくれ！」

だがリタは振り返りもせず、時計塔内に進んだ。相田は必死に追いかけた。

「リタ！」

リタは時計塔の螺旋階段をテンポ良く昇った。相田はリタの名を呼びながら追いかけて、そしてついに追いついた。相田は歩き進むリタの前に立ちはだかり、言った。

「リタ、世界を滅ぼしてはいけない。絶対だめだ！」

だがリタは無情に相田を後ろへ払い、前に進む。そのはずみで転んで顎を打った相田はしばらくその痛みに苦しみながらも、「リタ：だめだ！」と進みながら止めにいった。リタは相田を見つめて言った。

「あなたは怯えているのです。世界は必ず再生します。」

その言葉に対して相田は何も反論できなかった。ただひたすら足にしがみついたり、立ちふさがるなど物理的にリタを止める事しかできなかった。

そして、エレベーターの前にたどり着いた。リタは話す。

「このエレベーターは時計塔の中核へと、繋がりますが、開発者以外の人間は入れません。入れば死ぬでしょう。しかし、私は人間ではなく、おまけに時計塔と通信ができます。ですから私だけが中に入れるのです。」

相田は滅びへの極限の恐怖でひいひい喚きながら言った。

「世界が再生するかどうか分からないだろう！？」

「その点はお安心下さい。世界は必ず再生します。なぜなら世界は意識であり同時に意識から作られるからです。破壊された世界の人間は新たに世界を創るでしょう。」

「……」

「それはユートピアです。宗教的に言えば天国、極楽浄土、などでしょう。カオスに満ち溢れた旧世界を滅ぼし、代わりに人々は安楽へとたどり着きます。だから政府は私を使ったのです。旧世界の特徴である機械を。」

「……」

「では、さようなら。お逃げなさい。」

エレベーターが閉まった。相田はリタがエレベーターに入っていた事に気付かず、茫然と見つめていた。やがて次に起きる事態を察し、相田はリタの言われるままに逃げ出した。

時計塔の外に出た時、爆音がした。時計塔が音を立てて崩れた。全世界から時計塔の支配は消え失せたのだ。

その次の瞬間、青空に黒い穴が空き、青空が吸い込まれ、真っ暗になった。続いて車や人が地上を離れ、穴に吸い込まれようとした。悲鳴が満ちた。相田は必死に手すりに掴まった。人が次々と悲鳴を上げながら穴に吸い込まれた。ぎゃおんぐおんと相田のつかんでいる手すりが外れようとしていたので、電柱に移った。手すりは地面を離れ、空へと落ちて行った。やがて道路のコンクリートがずがずがと破壊され空へと吸い込まれた。電柱は耐えきれなくなりぼきりと折れて、相田は空へと吸い込まれた。

周りを見渡すと他にも一緒に空を浮遊している人がいた。彼らは突然の事に茫然としていた。相田は龍子を見つけた。呼び掛けようとしたが空気の吸い込まれる音で聞こえない。地面を見つめると大量の砕けた岩しか見えない。空を見つめた。穴がもうすぐやってくる。それは虚無の暗黒。その先、空の向こうには何も無い。目の前が真っ暗になった時相田の意識はふつ、と無くなった。

慌ただしい車の音が聞こえた。ビル郡の立つ大都會では人々がいつものように忙しく働いていた。人々は忙しいのが好きなのだ。あくせくと書類を作ったり出張したり。

その中で相田と言う男がいた。彼はサムラ電機と言う会社に勤めていた真面目な会社員であった。

ある日、彼は会社に向かおうとスクランブル道路に向かった。人が密集して歩きにくい。

だが、その人々の中に、懐かしい顔を発見した。だが、いつ会ったのか思い出せなかった。遠い遠い記憶の彼方、そもそも会ったのか、会ってないのかすら分らない。相田はふと一つの幻影が見えた。今この世界が暗黒の空に向かって全て吸い込まれる。相田は恐くなくてまばたきをした。幻影は消えた。なんだろうか、あの光景は。相田は妙に生々しいその幻影を咀嚼しながら前に進んだ。やがてうつすらと何か分かりかけてきた。ここは、虚構の世界なのか。突然彼は、虚無感に襲われた。この世界にはいられないと思った途端に、世界の外に転落した。そこは夢に見た光景だ。永遠の階段。浮かぶ世界。相田は暗黒に浮かぶ世界達を背景に、永遠に落ちていった。

エピローグ

「…そんな事があつたんだよ。」

父が言った。話し始めたのが昼なのに、もう夕方だ。しかし息子は訊ねる。

「でも、分からないよ。どうして父さんはここにいるの？」

「あ、そうだな。言い忘れた。僕は世界の外に放り出された。それ以来独りぼっち。やがて僕は自分自身の平和を望むようになった。そして、僕は一つの世界になった。」

「どんな世界？」

「以前は得られなかった、平和な家庭の世界だよ。」

父「相田は家の外に出た。日は沈みかかっている空は濃い青色になっている。」

相田は、空の向こうを見た。相変わらず彼処から誰かに見られている気がする。一つは、あの時計塔の世界の創り主からだ。おそらく相田の世界にもう関心を持たなくなるだろう。これから相田は自分だけで独立して生きるのだ。

もう一つ自分を見ている存在に気づいた。それは恐らく次の瞬間強制的に自分を見ることができなくなるだろう。相田は分かっていた。誰が見ているか。それは今これを読んでいる読者であろう。そんな気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9481m/>

空の向こう

2010年10月11日15時09分発行